

2021年10月31日 宗教改革記念日(降誕前第8主日)礼拝メッセージ

「どうして顔を伏せるのか」

牛田匡牧師

聖書 創世記 4章 1-16節

今日は宗教改革記念日の礼拝ですが、もう一つ、衆議院議員選挙の投票日でもあります。私も今朝、投票に行ってきました。新聞などのメディアの予想では、「自民党」が議席を減らして、「日本維新の会」が議席を増やすだろうと予想されていたので、改めて「日本維新の会」の公約や目指しているものを読みました。2012年の結党以来、この停滞する日本の窮状を打ち破るためには、これまでの社会制度を根本的に大改革する「グレートリセット」が必要だということを訴えています。すべてを白紙に戻して、最初の状態にセットしなおすというわけです。

確かに、自民党のアベノミクスでは、景気は回復せず、ごく一部の企業や投資家だけが更に豊かになった一方で、大多数の人々の生活は明らかに貧しくなっています。また超高齢化社会を迎え、税収は増えず、年金や医療保険などの社会保障費ばかりが膨らみ続けていますので、それらをすべて無くしてしまって、リセットするというのは、たまりにたまった怒りの向かう方向としては、分かりやすいようにも思います。しかし、そのような破壊の先には、何が待ち受けているのでしょうか。大阪では病院が削減されコロナ禍の中、医療崩壊が起きました。また人権博物館も閉館させられ、釜ヶ崎でも「再開発」の名の下に排除と強制撤去が進められています。自分たちに都合の悪いものは失くしてもいい。そのような明らかな暴力を感じます。

今回の聖書のお話も、そのような他者に対する暴力に関するお話でした。聖書の冒頭にある天地創造の物語の続きで、最初の間であるアダムとエバの夫婦から生まれたカインとアベルという二人の兄弟が、人類最初の殺人を犯す、というお話です。なぜ、こんなにも残酷なお話が、聖書の冒頭に記されているのでしょうか。それはたとえ血のつながった兄弟でありながらも、他人に嫉妬し、怒り、相手を傷つけ、命すら奪ってしまうという人間の根源的なあり方、性質というものに、焦点が当てられているような気がします。

畑を耕す兄のカインと、羊を飼う弟のアベルが、それぞれに神への献げ物を持って来ましたが、神は弟アベルの羊を目に留め、兄カインの献げ物には目を留めませんでした。それで、カインは激しく怒って、顔を伏せ、その後、アベルを殺してしまいます。しかし、このお話を読むと、そもそも神は、カインにもアベルにも、どちらにも公平に接するべきではないかと思ってしまう。もしも神が、アベルには目を留め、カインには目を留めなかったのだとすれば、やはりカインの方に、何か落ち度があったのでしょうか。

私たちは自分をカインの立場において、この物語を読む時、自分の献げ物が神に認めてもらえず、目に留めてもらえなかったら、寂しいと思い、悔しいと思い、隣のアベルを嫉妬することに共感するのではないのでしょうか。そしてまた神から目を留めてもらえないのは、アベルが自分の持っているものの中から最も良いものを献げたのに対して、カインはそうではなかった。カインは最良の物を自分のために隠し持っていたのではないかとか、長男、兄としていつもアベルに威張っていたのではないかとか、何か良くない理由があったに違いないと考えたりしてしまいます。それこそ、新約聖書の中にも、アベルは信仰の人であり（ヘブライ 11:4）、カインは悪い者であった（1ヨハネ 3:12、ユダ 11）と書かれていますから、およそ2000年前にも、そのような理解が確かにあったということが分かります。

しかし、このヘブライ語聖書の物語自体には、そのような二人の心持ちなどの詳しいことは何も書かれていません。むしろ、「神様は誰にでも公平に接して、献げ物は等しく喜ばれるはずだ」というような私たちの思いとは別に、神は自由に選ばれるということなのではないのでしょうか。神は誰でも彼でも公平に接される方ではなく、自分自身でも「私は憐れもうとする者を憐れみ／慈しもうとする者を慈しむ」（ローマ 9:15、出エジプト 33:19）と言っているくらいに、えこひいきをされる方です。そしてそのえこひいきの基準は、「あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった」（申命記 7:7）からこそ、あなたがたを選んだと言われている通りに、強い者、豊かな者を選ばれるのではなく、弱くされ小さくされている者を選ばれるというものです。

自分の献げ物に目を留めてもらえなかったカインは激しく怒り、顔を伏せましたが、そのカインに向かって神は「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか」（6）と言われました。「もしあなたが正しいことをしているのなら、顔を上げられるはず

ではないか。正しいことをしていないのなら、罪が戸口で待ち伏せている。罪はあなたを求めるが、あなたはそれを治めなければならない」(7)。この言葉は、怒ることそれ自体が悪いこと、罪だと言っているのではなく、その感情に支配され振り回されないように、治めなければならない、ということを行っているのだと思います。ですが、カインにはそれが出来ませんでした。

カインは弟アベルを殺した後、神に「あなたの弟アベルはどこにいるのか」と問われた際にも、「知りません。私は弟の番人でしょうか」(9)と斜に構えて答えました。それこそ顔を伏せているのと同じように、神に対して正面から向き合おうとしない姿勢でした。カインは先に「どうして顔を伏せるのか。もしあなたが正しいことをしているのなら、顔を上げられるはずではないか」と言われていましたが、その言葉は彼の心には響いていませんでした。「自分が評価されないのは、アベルのせいだ、神のせいだ。自分は悪くない。自分が怒っているのも当然のことだ」……。そのようなカインの思いが、アベルを殺しました。

自分の献げ物に目を留めてもらえなかったのは、実はたまたまだったのかもしれませんが。ですが、その事実と向き合えずに彼は激しく怒り、また自身の中に渦巻く激しい怒りに対しても、正しく向き合い、それを支配し、治めることが出来ませんでした。その結果、彼は呪われる者となり、地上をさすらう者とされますが、その後に及んで漸く彼は自分が犯してしまった^{あやま}過ちの大きさに気づき、恐れおののきます。しかし、神はカインの命を奪うことなく、カインに「しるし」を付けて、生かしておきました。罪人にやり直しのチャンスを与えられたというわけです。大きな過ちを犯してしまったとしても、その事実から目を逸らすことなく、顔を上げて、その事実と向き合い、償いの道^{つく}を生き直そうとする罪人を、神は決して見捨てられません。なぜなら神の選びはそのような者をこそ選び、イエス・キリストが来られたのも、そのような人々を招くためだったからです(マタイ9:13)。

今日10月31日は、宗教改革記念日です。今から約500年前の1517年の10月31日にマルティン・ルターがヴィッテンベルグ城の教会の門の扉に、「95カ条の論題」を掲げたことが、宗教改革の火種となったと言われています。当時のローマ・カトリック教会は、大聖堂を建築するために多くのお金が必要だったという財政的な理由から、死後の世界での刑罰を軽減するという「贖宥状」^{しよくゆうじょう}を大々的に販売していましたが、魂の救いをお金で買うということに対して、修道士であり、

かつ神学校の教師でもあったルターは疑問を持ち、95カ条にも及ぶ質問、論題を公開討論として、提示しました。そこから宗教改革の運動はヨーロッパ中に広がっていったと言われていいます。そしてまた、そのような宗教改革、プロテスタントの流れに対峙する形で、ローマ・カトリック教会内でもそれまでの自分たちのあり方を見直す動きが起こって来ました。

本当の信仰とは何か、救いとは何か。教会が示していることは、聖書に基づいて本当に正しいのか……。今日の私たちにとっては、それぞれの言葉で聖書が読めたり、賛美歌が歌えたりすることも当たり前かもしれませんが、それらもこの宗教改革によるものでした。宗教改革の伝統の上に立つ教会に伝えられている格言として、「教会は絶えず改革され続けなければならない」という言葉があるそうです。「水は流れ続けると腐る」というのを同じで、一カ所に留まっていたは衰退していつてしまうということでしょう。

目の前には自分にとって都合の悪い、見たくない現実があるかもしれません。けれども、それから目を逸らし、顔を伏せていては、変革も新しい創造もありません。今、日本だけではなく、世界各地でファシズムが再び起ころうとしている気がしてなりません。「ファッショ」とは「束」や「団結」という意味のイタリア語ですので、「ファシスト党」とは「集団党・党派党」という意味になります。一人一人が個人として顔を上げ、名乗る集まりではなく、無数の人々が匿名のまま一つの群れとなって、大きなうねりを作っていくというところに、動き出したら誰も止めることのできない危うさを感じます。

自分自身の中にある怒りの感情に向き合い、それを管理して、それと共に生きようとするのではなく、一人一人が顔を伏せたまま、怒りや恨みの感情に任せて、敵と定められた特定の相手に向かってその力を振るう。その先にあるのは、改革や変革、新しい創造ではなく、単なる暴力と破壊しかないのではないかと危惧しています。そうならないためにも、投票という権利を無駄にせず、権利を行使して頂ければと思います。

「どうして顔を伏せるのか」……。確かに顔を伏せたくないようなことが、内にも外にも、たくさんあります。けれども、私たちは今日も、弱く小さくされている人たちを選ばれ、罪人を招かれる神様と共にあって、顔を上げて自分と向き合い、隣人と向き合う生き方へと導かれていきます。